峯村白齋

峯村白齋（通称：仙蔵）は、江戸時代、安永元年（1772）に南石村に生まれ、小林一茶とも友達付き合いをしていた、江戸後期の北信濃俳壇の頂点ともいうべき存在で、北信地区の俳諧宗匠として各地に多数の弟子を持ち、善光寺平の社寺に自筆の俳額を多数残しています。

左側は、「そのむかし何がこぼれて花の種」弘化２年（1845）74歳の作品、真ん中は、「庭草にみなすすらせん春の雨」（年代不詳）、右側は、「朝の間やきのこ市立つ山の町」嘉永４年（1851）80歳の作品です。

昭和14年「俳人白齋」の出版、昭和25年「白齋百年忌追善展覧会・句会」の開催、昭和33年「峯村白齋遺墨展」の開催など白齋は地域に受け継がれています。

堤の大コブシと荒古のサクラ

堤の大コブシは、旧豊野町の町木として、親しまれてきたモクレン科の落葉高木で、白い花を枝先につけて早春の到来を告げてくれます。樹高25m、枝張りは東西・南北それぞれ15m、推定樹齢300年、同種では市内最大級の自然木で、市天然記念物に指定されています。

荒古のサクラは、上神代地区の入植・開拓（昭和21年）の歩みとともに成長してきた、地区のシンボルです。樹種はエドヒガンで、花は淡紅色です。地面から5株が密生して出ており、上層は計16本の幹からなり、まるで1株の樹木のように見えます。樹高18m、枝張りは東西・南北それぞれ約10m、推定樹齢50年で、市天然記念物に指定されています。

川下のシンシュウゾウ下顎化石

シンシュウゾウの下顎骨とそれに植立した左右の第１及び第２大臼歯の化石です。鮮新世後期（約300万年前）の地層、猿丸層下部より産出したもので、川下在住の塚田良雄氏が発見し、昭和58年11月に発掘されました。

シンシュウゾウは、日本でも最大級のゾウとして知られており、体高約４ｍにも達する大型のステゴドン象の一種で、約500万年前に中国大陸から渡来してきました。化石の宝庫「戸隠」を代表する化石として、戸隠地質化石館に保管されており、長野県天然記念物に指定されています。

戸隠地質化石館所蔵の化石群

戸隠からは、160種類以上の貝類化石が豊富に産出します。これらは新第三紀鮮新世後期（約400万年～200万年前）のもので、「下榆（しもにれき）木化石動物群」と呼ばれています。また、クジラやサメ、オットセイ、ダイカイギュウ等の動物化石等も発見されています。浅くて寒流が流れ込むような海に住む種類が多く発見されていることから、約400万年前の日本海が戸隠周辺まで広がっていて、その後の隆起が大地をつくってきたことを裏付けています。戸隠地質化石館の資料群は、地域住民が関わりながら25年以上もの年月をかけて収集してきたもので、各方面から高い評価を得ています。また、戸隠積沢の化石群は市天然記念物に指定されています。

戸隠奈良尾弘法遺跡群

弘法大師が祀られている奥の院を中心に、途中に点在する洞窟群を利用した荒倉山内にある修験遺跡で、中世の趣を残す秘境です。洞窟や途中の急坂には、梵字を刻んだ岩や大日如来をはじめとする石仏が約90体安置されており、石仏の大部分は江戸時代末期に寄進されたもので、天台宗との法論に破れた真言系修験者の隠れ行場とする説もあります。

江戸時代には信仰の道として整備され、弘法様として地域住民に親しまれ、道普請や草刈りなど長い間守られてきた遺跡群で、毎月21日に地区内の女性が集まり、お念仏講を開き、お数珠回しを行っています。また、市史跡に指定されています。

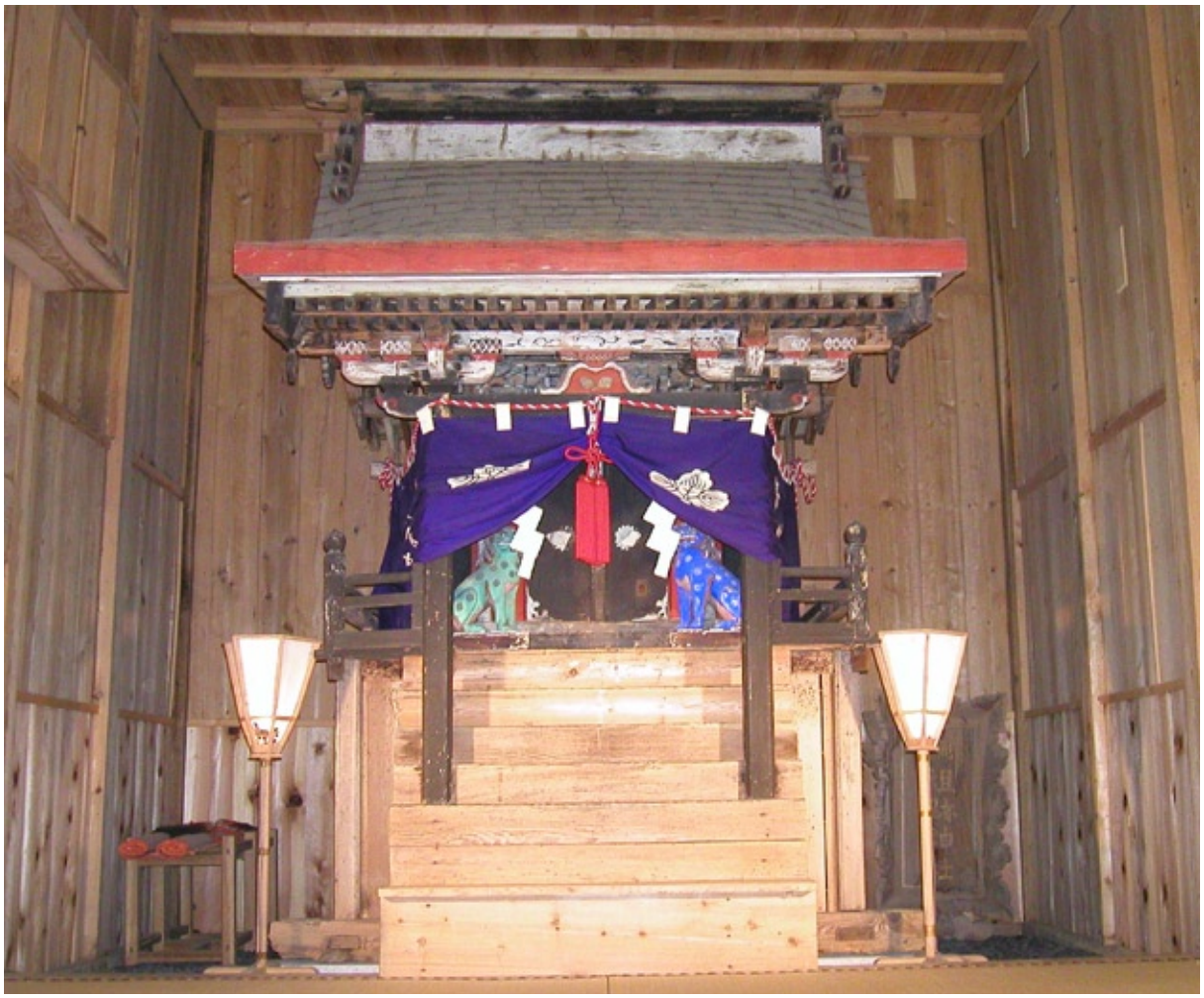
豊岡のカツラ

カツラは、日本各地にみられる普通の落葉樹ですが、建築材その他の用途が広いため、大木はほとんど切りつくされ、県内で老樹大木と呼ばれるものは、今では数本数えられる程度です。豊岡のカツラは、目通り周囲10.7m、樹高32m、樹齢推定約800年の長野県内一の巨木であり、地上５m付近で17本にわかれる幹に繁る枝は四方に均整に展開して25m四方をおおっています。親鸞聖人旧跡で、順徳帝の建暦２年（1212）聖人が戸隠参詣の際、荒倉山に上り鬼女紅葉遺跡の見聞の帰途、杖として使った桂の木を植えたものであると伝えられています。長野県天然記念物に指定されています。

今井映方

今井映方画伯は、明治34年戸隠村母袋に生まれた日本画家で、昭和24年の日本美術院展に入選して以降、その芸術性を認められ、高い評価を得ており、昭和58年には旧戸隠村名誉村民に選ばれています。今井映方画伯の作品は、豊岡のカツラや水芭蕉など、郷土である戸隠の自然を題材にしたものが多く、地域住民に愛され、郷土の誇りともなっています。いくつかの作品を故郷に寄付されており、「高原の秋」、「粉雪」、「霧」、「凍」の院展作品は、戸隠支所、戸隠中学校、戸隠小学校、戸隠公民館で大切に受け継がれています。

南方神社本殿



昔は諏訪大明神といい、後に南方神社と改称され、上祖山の鎮守として、大切に受け継がれてきた神社です。

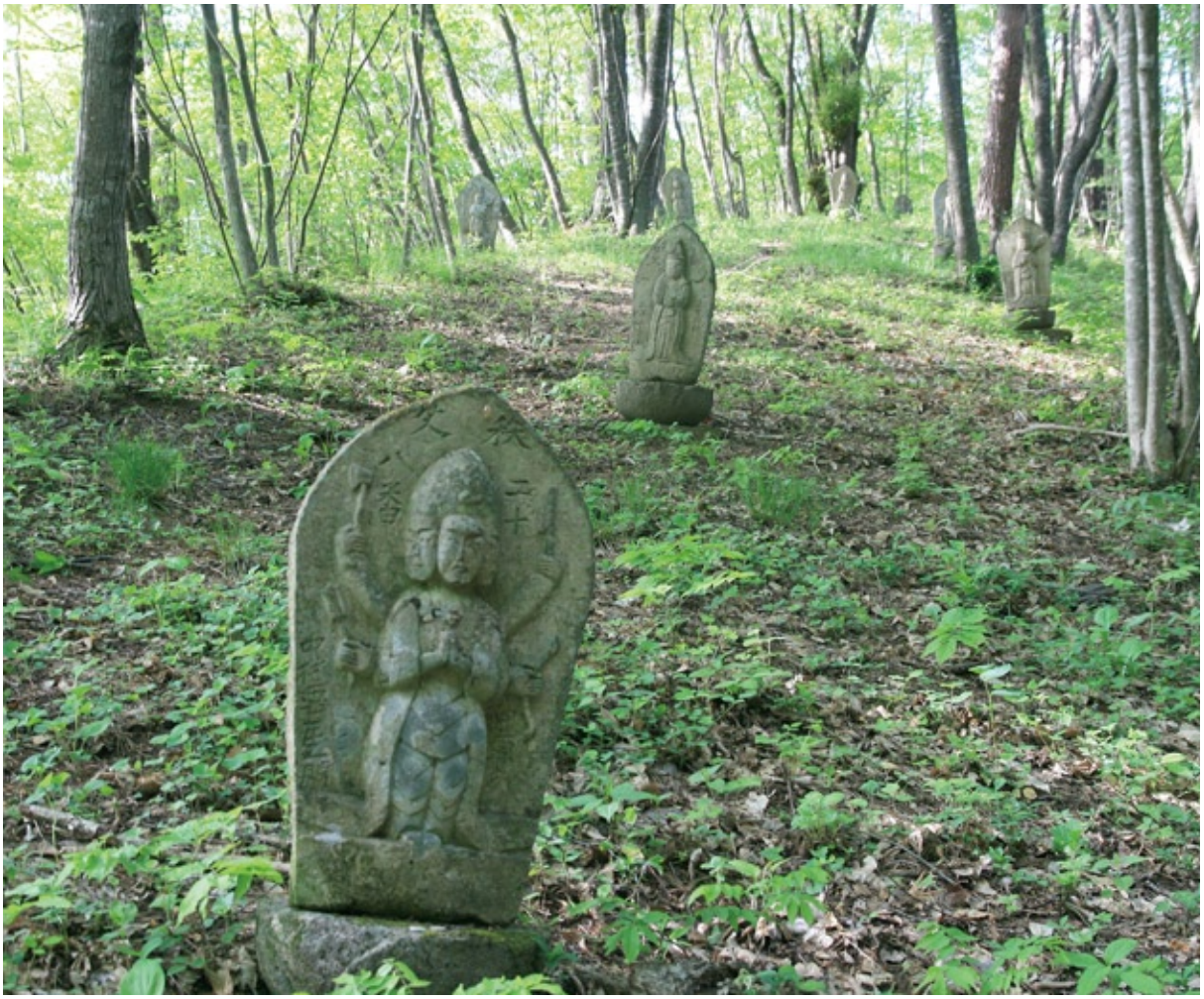
南方神社本殿は、間口94㎝、奥行148㎝、高さ3mで、屋根はこけら葺の一間社流造であり、向拝の組物は出三斗（でみつど）で、中庸は「かじの葉」の彫刻を入れた本蟇股（ほんかえるまた）を用いています。母屋は船肘木（ふなひじき）で、中庸を省略しており、繁虹梁は高低の少ない海老虹梁で一重眉を施しています。軸材部は、黒漆・朱漆塗で、組物・蟇股・桁等を極彩色にしています。覆屋内にあり、保存状態は良好で、様式から16世紀後半（室町時代後期）の建造物と推定されています。本殿は、県宝（建造物）に指定されています。

鬼無里ふるさと資料館
屋台・神楽

江戸時代後期に作られた屋台４台と神楽２台は、木彫りの名工北村喜代松父子によって彫刻が製作されました。欅の一木彫りによる龍や透かし彫りの龍、得意とした牡丹と唐獅子の細工が見事に施されています。

鬼無里の各神社で所有していたものですが、村制100周年記念事業として、屋台・神楽大集合が行われたのを契機に、鬼無里ふるさと資料館が建設され、6台を展示し年間を通じて見ることができます。鬼無里神社の祭典には、屋台１台と神楽が昔から伝承された囃子を伴って雄大に巡行しています。皇大神社・鬼無里神社・三嶋神社・諏訪神社の山車と白髯神社・賀茂神社の神楽は、市有形文化財（工芸品）に指定されています。

観ノ山百体観音



観ノ山百体観音は、秩父・西国・坂東の計100体の観音像と1対の常夜灯からなり、札所めぐりの巡礼を終えた人たちが建立し、観ノ山に安置したものとされています。芦沼池のほとりから尾根に沿って「秩父」34番、鞍部を経て西向斜面の南側を「西国」33番で頂上に至り、その平の「坂東」1番から北西斜面を下り33番で出発点に戻るように配置されています。観音像の年代は不明ですが、「秩父」1番の常夜灯には天保壬寅(天保13年・1842年)とあり、それ以前(天保年間あるいは文政年間)に建てられたものと推測されます。

周辺の遊歩道整備等に取組むなど大切に保存されており、市の有形文化財(彫刻)に指定されています。